

梅鶯仏教壮年会報

第91号
2011年
10月30日

梅鶯仏教報恩講

十一月二十六日(土)
夕六時より

○お勤め(正信偈行譜)
○住職法話
※懇親会

法輪寺報恩講にもお参り下さい

日時：十一月二十日(日)
講師：寺川幽芳師

心の窓を閉めていると、
明るいこの世も、暗く思える。
心の垣根を作っていると、
広い世間も狭く思える。
感謝の眼を綴じていると、
恵まれているのに不足に思える。

寺川幽響先生

親鸞聖人750回 大遠忌法要に参拝して

会長 北村新一

昨年9月25日の坂田組お待ち受け法要から約一年、本年10月15日、待ちに待った本山御影堂での大遠忌法要にお参りさせて頂きました。法輪寺からは、梅鶯仏教会員をはじめ21人が参加させて頂きました。朝8時の集合で、バスにての旅行でした。14時法要開始までは、影後、門前町(ご縁まち)エリアの散策にて過ごしました。特に龍谷ミュージアムは、『釈尊と親鸞』と題しての特別展でしたが、とても貴重な仏教関係の展示品で、再度足を運びたいと思いました。そして、いよいよ本番となる御影堂での法要。法要は本願寺総長橋正信氏の挨拶で始まり、宗祖讃仰作法が勤められました。全国38団体、約三千人の正信、仏偈は、音楽法要にて唱和のさで、とても荘厳で心和ませるものでした。

その後、ご門主様、新門様のお言葉を頂きました。言葉をお二方ともに、この度の大遠忌法要のスローガンとなっておりました。『世の中安穩なれ』との願いが強く込められておりました。強く、そのお気持ちを通じただけなく、お参りができたという感謝の気持ちを持ち、自然と参拝者全員の顔に表れていました。参拝後はどの顔も柔和で上気しておらず、とても満足しているというように思えました。記念撮影時の緊張した顔とはうらはらに、安心感一杯の顔にて、参拝記念のおみやげを沢山手にしての帰路での会話には、お参りできていた事への喜びと興奮が言葉に表れていました。さらには昨年度の坂田組大会での思い出ばなしまで出てまいりました。私自身、法要にお参りできたのも梅鶯仏教に加入させて頂いたおかげだと、深く感謝致しております。最後に有りました、梅鶯仏教の皆様には、本年度の行事(報恩講・除夜会)には、多数のご参加をお願い致します。合掌

究に、情熱を傾けられまし
た。

当時の中国は南北朝の天子の時

（國王）からは「神鸞」と
 称えられ、南朝の梁の国の
 天子からは「鸞菩薩」と敬
 慕され、二人の国王は朝夕
 つねに曇鸞大師のおられる
 方向に向かつて礼拝をされ
 たといわれます。

権勢を誇る超大国の両国
 の国王が、ともに「気高く
 尊いお方」とあがめられた
 ということは、曇鸞大師が
 学識や人格がきわだつて優
 れておられたのみならず、
 人を引きつける素晴らしい
 お方であつたことがうかが
 われます。

親鸞聖人は、
 本師曇鸞梁天子
 常向鸞処菩薩礼

梁の天子が常に曇鸞さま
 の居られるところに向い、
 菩薩様と礼されました、と
 詠われています。

ところが曇鸞大師は、
 「大集経」の研究の途中で
 病氣になつてしま
 われたのです。

そこで、やはり
 まず健康で長寿で



經の「一つである」「仏説觀無量壽經」を授けるのです。曇鸞大師は、すぐさま迷いからさめ、苦勞して入手した仙經をことごとく焼き捨てて、淨土の教えに歸依されたのです。それからは自力聖道の教えを一切捨てられて、淨土他力の教えに精進され、ひたすら民衆に念仏をすすめた彌陀淨土への往生をうながされたのです。

○煩惱のふかさ
 仏教は生老病死の迷いを超える教えでありながら、その偉大なる仏教学者の曇鸞大師でさえも、生老病死に囚われられたのです。たとえそれが仏道を究めたいと願われてのことではあつたにせよ、人としての煩惱の深さを改めて感じざるを得ません。

親鸞聖人は、
 三藏流支授淨教
 梵焼仙經歸樂邦
 三藏流支から淨土教を授かり、仙經を焼き捨てて、南無阿彌陀仏のみ教えに歸られた、と詠われています。

以下次号 仏壯7月例会より

以下次号 仏壮 7 月例会より